にごりえ　冒頭部分

樋口一葉

おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか、又素通りで二葉やへ行く気だろう、押かけて行つて引ずつて来るからさう思ひな、ほんとにお湯なら帰りに屹度よつてお呉れよ、嘘つ吐きだから何を言ふか知れやしないと店先に立つて馴染らしき突かけ下駄の男をとらへて小言をいふやうな物の言ひぶり、腹も立たずか言訳しながら後刻に後刻にと行過ぎ

るあとを、一寸舌打しながら見送つて後にも無いもんだ
来る気もない癖に、本当に女房もちに成つては仕方がな
いねと店に向かつて閾をまたぎながら一人言をいへば、
高ちやん大分御述懐だね、何もそんなに案じるにも及
ぶまい焼棒杭に何とやら、又よりの戻る事もあるよ、心
配しないで呪でもして待つが宜いさと慰めるやうな朋
輩の口振、力ちゃんと違つて私しには技倆が無いからね、
一人でも逃しては残念さ、私しのやうな運の惡るい者に
は呪も何も聞きはしない、今夜も又木戸番か何たら事

だ面白くもないと肝癪まぎれに店前へ腰をかけて駒下駄のうしろでとん〳〵と土間を蹴るは二十の上を七つか十か引眉毛に作り生際、白粉べつたりとつけて唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅も厭やらしき物なり、お力と呼ばれたるは中肉の背恰好すらりつとして洗ひ髪の大嶋田に新わらのさわやかさ、頸計の白粉も榮えなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて、烟草すぱ〳〵長烟管に立膝の無作法さも咎める人のなきこそよけれ、思ひ切つたる大形の裕衣に引かけ

準2級
江戸以降

帯(おび)は黒繻子(くろじゅす)と何やら(なにやら)のまがひ物(いもの)、緋(ひ)の平(ひら)ぐけが背(せ)の処(ところ)に
見えて言(いわ)はずと知れし此(この)あたりの姉さま風なり、